

2018 モリタ友の会 クリニカルチャー講演会 『「食べる・噛める喜び」を支援する歯科医療 ～超高齢社会において歯科医療に何が求め られているのか～』開催レポート

2018年11月25日（日）、モリタデ
ンタルプラザ2F 100周年記念ホール
にて、クリニカルチャー講演会『「食
べる・噛める喜び」を支援する歯科医
療～超高齢社会において歯科医療に
何が求められているのか～』が開催さ
れました。

講師にはデンチャースペース義歯
の考案者であり、長年在宅医療に取り
組んでこられた加藤武彦先生（神奈
川県開業）、要介護者の口腔ケアに欠
かせない球状ブラシ「くるリーナブラ
シ」の開発者・黒岩恭子先生（神奈川
県開業）、地域包括ケアシステムを見
据えて多職種との連携、地域活動を
されている足立融先生（鳥取県開業）



をお招きしました。80名近い参加者
が集まる中、超高齢社会における歯

科医療のあり方を、それぞれのお立
場からお話いただきました。

加藤武彦先生「食べる喜びを支える歯科医療～診療室から訪問診療まで～」



加藤先生は講義の前に、「何を求め
て参加されたのか」と受講者に質問。
「訪問診療では従来の義歯治療や口腔
ケアだけでは十分に対応できない」と
いう悩みが受講者の皆さんから挙が
りました。特に認知症患者の対応に
は多くの先生が苦勞されている様子
でした。

それに対して「患者さんの気持ちに
寄り添って治療に臨むことで、その
方が本来どんな人柄なのかに理解が
及びます」と加藤先生。その実証例の
紹介を兼ねた講義が始まります。

加藤先生は認知症について次のよ
うに解説。「大脳新皮質が司る新しい
記憶は侵されますが、大脳辺縁系が
司る本能、情動、五感が残存します。
そのため、認知症患者は記憶違いな
などを指摘されるとプライドが傷つき、
BPSD（患者の精神行動異常）が発現
するのです。ですからBPSDを引き
起こす原因は健常者側にあるとい
うことをまずは意識してください」。

こうしたことを踏まえ、認知症高
齢者の治療を成功させるポイントを2

つ挙げます。

1つは患者さんの輝いていた時代と
現在の苦しみを理解すること。もう1
つが総義歯の即日改造によって現役
時代の顔貌を再現すること。そして、
それらを実践するために、認知症患
者とのコミュニケーション術「バリ
デーション療法」と顎堤条件に左右さ
れずに吸着が得られるニュートラル
ゾーン理論によるデンチャースペ
ース義歯がご自身の診療のベースと
なっていることを話されました。

その後は、義歯治療後に表情が明
るく改善した認知症患者の動画など
を紹介。歯槽頂をどこまで出すかな
ど、義歯製作に関する具体的なテク
ニクの解説も行われました。

黒岩恭子先生「歯科が担う『口腔機能改善と口腔ケアの重要性』～患者さんに寄り添う口腔ケア・口腔リハビリ」



黒岩先生は冒頭に「くるリーナブラ
シ」の開発意図を説明。その中で口腔
乾燥によって、咽頭（上・中・下）に
貯留した痲皮状態の唾液や痰、血餅
の問題が高齢患者を苦しめているこ
とを報告しました。

その後、会場から積極的に挙手さ
れた受講者1名が患者役となり、口腔

ケア・リハビリを実演。

乾燥した痰に見立てたオブラート
を口腔に付着させ、加えて頸部伸展
状態を再現すると、患者役の受講者
は「喋ることも嫌になります」と感想
を漏らします。「口腔乾燥と頸部伸展
が進むと呼吸が苦しくなり、口腔機
能や嚥下機能が悪化します」と黒岩先
生。

特に重度化した高齢者にアプロ
ーチする際には、口腔内を触る前準備
として身体調整を行うことが重要で
あると強調します。

「呼吸は飲食と関係が深く、見落
としてはいけないポイントです。身体
調整を行うことで呼吸が楽になり、
嚥下機能を良好に導き、自己嚥出も

可能となるケースがあります」。

身体調整の実演では、頭頸部を安
定させるために臀部の前滑りを防止
すること。さらに、上肢のサポート
が重要になることを解説。

「前滑りを起こすと腹部が圧迫さ
れ、深い呼吸ができなくなります。
当然、頭部は安定せず、頸部も伸展
します。また、肘や腕の重さがある
と、嚥下に重要な舌骨下筋群が引っ
張られてしまい、嚥下機能に弊害が
出ます。ですので、クッションなど
を使用し、身体調整をすることが大
切です」。

最後に保湿剤と「くるリーナブラ
シ」による口腔ケア、口腔リハビリを
実演し、講義を終えました。



講義開始前に、加藤先生の義歯製作の様子が
スクリーンに写され、講義を待つ受講者の皆
さんは熱心に見入っておられた。



受講者の一人を患者さんに見立て、口腔ケア・
リハビリの実演を行った。



オブラートで高齢患者の口腔内を再現する黒
岩先生。口腔や咽頭の痰が嚥下機能などを低
下させている。



この日は歯科用ポジショニングクッション
「USAKO」の製造元 アイ・ソネックス(株)社
長であり、作業療法士の舟木美砂子様も来場
され、身体調整のポイントを解説された。



太腿、上肢の下にクッションを置き、ポジシ
ョニングをしている様子。



清掃目的だけでなく、口腔内を刺激すること
で唾液の分泌を促す「くるリーナブラシ」の実
演の様子。

足立融先生「地域が求める、地域と繋がる歯科医療～多職種と共に高齢者の生活を支える」



足立先生は在宅ケアに携わる多職種が集う「鳥取県西部在宅ケア研究会」の発足メンバー。同研究会は今年、長年の取り組みが評価され、保健文化賞を受賞し、その活動が注目されています。

講義では、加藤先生、黒岩先生のもとで得た学びの実践を紹介。そして、高齢者の心身・認知機能の低下「フレイル」の予防に歯科も本格的に

向き合わなくてはならないと話されました。「国の医療費は42兆円。歯科も医療者として緊張感を持って、フレイル予防に関わらなくてははいけません」。高齢となり歯科医院に通院できなくなったことで、それまで口腔管理ができていた高齢者の口腔内が崩壊、そのことが全身的な疾患につながった例を紹介すると、「患者さんを最期まで診る覚悟を持った質の高い歯科を目指したいと思っています」と足立先生。

それを実践するためには多職種や地域との連携が大切です。「要支援者・要介護者が来院したら、包括支援センターやケアマネさんに電話を入れ、どんな状態かを確認する。そういうちょっとしたことから地域との連携は始まります」。

また、歯科同士との連携も重要だと強調。「1人でやってもうまくいきません。必ず歯科の仲間を集めてください。チームのほうが必要が高まり、多職種連携もスムーズになり、患者さんも増えていきます。そういう流れを作っていただきたい。そして、それが地域包括ケアにもつながるものと思います」と結ばれた。

<講演会を終えて>

加藤先生にあらためてメッセージをいただくと「元気なときだけ診る、それが許されない時代です。医療人として、訪問診療に関心を持つ先生が増えて欲しいです」と話されていました。モリタでは、高齢者や有病者、訪問歯科をテーマにしたセミナーを今後も引き続き企画してまいります。



頸部伸展で臥床している患者さんは口峽が狭く、嚥下障害などを起こしていることについて、自作の口腔模型を使って解説する黒岩先生。



行政を含めた他職種、そして歯科同士の連携が大切と語る足立先生。「連携することで足りない技術を補い合えます」。



講演会の最後に設けられた質疑応答では活発なディスカッションが行われた。



会場内には訪問診療の際に使用する器材などの展示も行われた。



左から黒岩恭子先生、加藤武彦先生、足立融先生。